

編集後記

今回は、“差別化”について考えたい。

まず、“差別”という言葉、その意味は“違いをつけること”であるが、その使われ方は“差別待遇”や“人種差別”など、好ましくない状況を表現することが多い。勿論、公正な社会にあって、差別は決してあってはならない。

だが、その差別にたった一文字“化”を付けただけの言葉“差別化”は、個性を尊重する現代社会にあって、望ましい現象と評価される。他の人と自分との違いを際立たせること、それが個性であり、自分の存在を実感させることになるらしい。

この差別化、是非、進めて欲しいと思う非開削分野の一つは、管路更生技術だ。下水道管渠など地下管路が、永年の使用により、外力による損傷や流水による内面の腐食などで、管路としての強度や止水性を失った場合、既存の管路の内側に新たなライニング管を構築し、本来の強度と止水性を取り戻すための技術だ。今日、私達の快適な生活基盤を多くの地下インフララインが支えている状況からして、それらの機能を

保持更新する、しかも道路を掘り返さない手法は、これからの社会に絶対不可欠だ。

管路更生技術は、現在、下水道分野に限らず、水道、かんがい用排水路などの事業分野に広く活用されている。殊に下水道分野では、ここ十年の施工実績の上昇ぶりは、右肩上がりどころか、うなぎのぼりを超え、鯉の滝登りに近い。こんな状況だからこそ、今、早急に求められるのが“個々の技術工法の差別化”ではないだろうか。

確かに、現在、市場にある管路更生工法は、いくつかの区分に分類されている。まず、工法として「反転工法」、「形成工法」と「製管工法」に分類される。だが、これは、ライニング管を形作る手法であって、工法の優劣、特徴、性能、適用条件を比較できるものではない。また、更生管を「自立管」、「複合管」と「二層構造管」に分類するが、既存管に残された機能（強度、止水性）と更生管に期待される機能との役割分担であって、各工法の特徴ではない。いずれの工法でも、自立管、二層構造管を求めれば、それなりのものが

提供される。どれを選んでも結果は同じとなれば、買い手側が一番安い物をベストとする。ならば、売り手側は、その商売で優位に立とうと思えば、売値をギリギリにまで、時にはそれを超えての安値、ダンピングも辞さない状況となる。こんなこと、誰も望んでいない。

現在、公的機関が審査し、その有用性を証明した管路更生技術だけでも20工法を超える。だが、その証明はその工法固有の評価基準に照らし、その信用性を確認したに過ぎない。それらを横断的に評価できる基準軸が整備されていない。特定の更生工事について、適用条件と採用可能な工法の拾い出し、ある一つの評価軸での相互比較、総合比較、工法選定手順とその基準などは、買い手側としては絶対に必要な情報だ。

これらがキチンと整備されて、ようやく適正かつ公正な市場となる。各商品（工法）の個々の差別化が明確にされてこそ、フェアな競争が確保されるというものだ。

昨年8月に設立された「日本管路更生工法品質確保協会」への期待は大きい。〈編集委員長 石川和秀〉



No.58 2007 Jan. 平成19年1月1日発行

編集：「No-Dig Today」編集委員会
編集企画小委員会

発行所：日本非開削技術協会

〒107-0052 東京都港区赤坂1-6-14
赤坂協和ビル3F

TEL.03(3586)5181 FAX.03(3586)5183

発行人：松井大悟

印刷所：株式会社 LSプランニング

● ご案内 ●

◇本誌のご購読について

ご購読をご希望の方は、巻末の振込み用紙で当協会まで直接お申し込み下さい。

○購読料（税込み）

1冊 1,500円（本体1,429円）〒400円
1ヵ年（4冊）6,000円（本体5,716円）〒1,600円

◇発行

年4冊：1・4・7・10月1日発行

◇広告のお申し込みについて

本誌に広告の掲載をご希望の方は、編集室までご連絡下さい。媒体資料等お送り致します。

◇投稿

・技術論文

非開削に関連する技術、製品についての論文を募集しています。

投稿論文は、委員会にて選考の上掲載論文には薄謝をお送り致します。

◇情報のご提供について

・No-Dig NEWS ダイジェスト

非開削技術に関連する新技術、新製品、図書の紹介、関連団体の動向や講演会、セミナー・展示会の案内など、情報をお寄せ下さい。